



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | ＜書評＞「呆けないための生活学」（大国美智子・乾正編，中央法規出版，1,300円）                                           |
| Author(s)    | 痴呆性老人予備軍指令長官                                                                        |
| Citation     | 大阪公衆衛生. 1988, 53, p. 28-28                                                          |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/83737">https://hdl.handle.net/11094/83737</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

### 「呆けないための生活学」

大国美智子・乾正編(中央法規出版 1,300円)

生きとし生けるもの、生き永らえる限り必ず老い、そして死を迎える。このさだめからは、何者も逃れることはできない。

ゆえに、この「老い」をめぐって、古来から数多くのドラマが生まれた。そして、本書に豊富に収録されている、「呆け」に関する相談事例の一つ一つもまた、まぎれもなくそういった類のドラマである。これらの共通項<sup>1)</sup>、呆け老人は「呆け」であることにより、周囲の社会から（自分の家族からでさえ）疎外され、そのことにより益々呆けが進行するということである。我が国では、従来から、「お年寄り大切にすべきである」という美名のもとに、老人が「捨て扶持」として扱われてきたように思う。まさに、呆け老人問題は、現代の「姥捨て」といえる。

人口が益々高齢化するなかで、我々行政がいくら立派な施設を整備し、施策を充実させても、それだけでは、この問題が解決されうべくもない。何か、社会自体の発想の転換といったものが、絶対に必要であることを本書の実例が如実に物語っている。

こう書くと、本書が何か小難しい本の印象を与えてしまうようだが、全く逆で、文章は平易かつ明快、タイトルどおりの実用書である。事実我が国において、呆けの最大の原因となっている脳血管疾患の予防法に多くのページをさいているし、呆け老人、また今後呆け老人になる可能性のある老人をかかえる家族の対処の仕方が、わかりやすく理解できるようになっている。

ともあれ、本書は、そういった家族、そして、今まだ呆けていない全ての人に一読の価値のある本である。

(痴呆性老人予備軍指令長官)